

《書 評》

Marc Mastrangelo, *The Roman Self in Late Antiquity :
Prudentius and the Poetics of the Soul*

Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 2008, pp.viii+259.

南 雲 泰 輔

「プルデンティウスは初期キリスト教最大のラテン詩人であった。かれの作品は熱心に筆写されたのみならず、絵画にも取りいれられた。〔中略〕彼は聖アンブロシウスとともに最初の賛美歌作者の一人で、そのロマン主義的・神秘主義的な性格はとりわけ強い印象を与える。彼の詩は決して聖アンブロシウスにひけをとらず、その詩的幻想と修辭的・文体的な迫力は中世ラテン詩人に強い影響を与えた。かれの詩人としての名声はざんねんながらこれまで人々にあまり知られず、とりわけわが国ではプルデンティウスの名さえ知らぬ人が多いのではなかろうか。¹⁾」

本邦における初期キリスト教ラテン文学研究の草分け、家入敏光氏がこのように述べた1967年から、およそ40年の歳月を閲した²⁾。この間にわれわれは、プルデンティウスが生きた時代——「古代末期」と呼ばれる——について飛躍的な研究の進展を経験することとなった。もはやかつてのごとく、「没落」「衰亡」の言辭のもとでの単一的理解が困難となるまでに、この時代のさまざまな側面が歴史家たちの関心の対象となり、旧説を塗り替えるべく新しい研究成果が陸続と公開されている³⁾。

プルデンティウスに関しても、この「古代末期」研究の進展と軌を一にするかのように、欧米諸国では1970年代から1980年代にかけて研究文献が相次いで世に現れ、2000年から2003年にかけては、索引も含め全3巻、全体でおよそ1500頁に及ぶC.Gnilkaの大著が公開されるに到った⁴⁾。他方、本邦のプルデンティウス研究とはいえば、盛んであるとは決していえないようである⁵⁾。近年「古代末期」研究が隆盛をみているとはいわれながら、歴史家がプルデンティウスを主題として取り上げた例は、1957年の長友栄三郎氏の論考以来、一篇も見出し得ない⁶⁾。誤解を恐れずにあえていうなら、家入氏が40数年前に述べたような本邦の状況は、欧米学界の現状に比するとき、依然ほとんど変化していないのである。

けれどもプルデンティウスの名は、ラテン文学史のなかでは決して外すことの出来ぬ名である。それは、本邦で公開されたラテン文学史の概説書のなかで、比較的早期のものにおいてさえ、彼について一項目が割かれていることから首肯されよう⁷⁾。

そこで、まずはそれらの概説書をも参照しつつ、本邦では今なお知るひとの多くはないと思しきプルデンティウスについて、必要最小限の情報を記しておくことが便宜であろう。

プルデンティウス (Aurelius Prudentius Clemens) は、348年ヒスパニア (現在のスペイン) の生まれ。はじめ地方に官職を得、のち同郷のテオドシウス 1 世のもとで相当の高位にまで進んだらしいが、やがて顯官を擲って詩人たるを志し、405年頃、齢57歳にして自らの作品集を公にした。その後の消息及び歿年は不明である。後代、キリスト教詩人として最大の人物と評され、『靈魂をめぐる戦い』(Psychomachia) や『日々の讃歌』(Cathemerinon)、『シュンマクス駁論』(Contra Symmachum, 全二巻) などが代表作とされる。なかでも『靈魂をめぐる戦い』は、「西欧における純粋なアレゴリー詩の最初⁸⁾」であり、中世に流行したアレゴリー詩に多大な影響を与えたといわれる。アレゴリーとは、家入氏によれば、「他のものを語ること、すなわち他のものの姿の下に、或るものを説明すること」であり、しかもその「歴史を秩序づける、歴史の内在的なアレゴリーは、一般には『類型学』『表象学』(Typologie) との密接な関連で示されている」という⁹⁾。

ここに紹介する Marc Mastrangelo の著書も、プルデンティウスの詩を理解するために中核的な位置を占めるのが予型論 (typology) であることを、彼の用いたアレゴリーに注目しつつ論じたものである。著者は、オクスフォード大学で修士号を、ブラウン大学で博士号を各々取得し、1997年からディキンソン大学古典学部で教鞭を執る。これまでにプラトン、ソフォクレス、そして本書で取り上げられるプルデンティウスに関する論考を公にしているが¹⁰⁾、これらを瞥見する限り、著者の関心の中心には、古代の人びとが魂 (the soul) や自己 (the self) というものをどう理解していたか、という問題があるようだ。このことは、著者の博士論文に基づく本書の書名からも察することが出来よう。目次は次の通り。

Acknowledgement/Introduction/1. An Epic Successor? Prudentius, *Aeneid* 6, and Roman Epic Tradition/2. Christian History and the Narrative of Rome/3. Christian Theology and the Making of Allegory/4. Pagan Philosophy and the Making of Allegory/Epilogue. Self, Poetry, and Literary History in Prudentius/Notes/Works Cited/Index

プルデンティウスは、ローマの詩とキリスト教とを器用巧みに融合することで新しい地平を切り開いたのだ、と著者はいう。プルデンティウスは、ホラティウスの歌った「詩人の不滅」というローマ的伝統を、自らのキリスト教信仰を詩に乗せて歌うことによって、装い新たに示したのだ、と。

プルデンティウス『日々の讃歌』序文の掉尾を飾る名句「私がこれらの詩句を書き綴り語り続ける間に／おお私は肉体の鎖から自由に飛びたい、／口を動かす舌が臨終のこゝろをむける天上へと！」¹¹⁾」をエピグラフに掲げたイントロダクションにおいて、著者が詩人について語るところを要言するなら、次のごとくである。

4世紀、ローマ帝国の支配的パラダイムとなったキリスト教の神聖な「真理」と、ローマ帝国の地上における成功とは、キリスト教に回心したプルデンティウスやアウグスティヌスらに対して新しいキリスト教文学の主題を与え、ここに新しい文学ジャンルが創造された。彼らにとって、執筆とは、精神的な生活について自らの信念を述べ、また、カトリックの理想と規律とに生きるよう、他のローマ人を説得することを意味するようになった。かようなキリスト教徒としての使命を果たすべく、プルデンティウスの舌から流れ出る詩は、ひとつの野心に満ちた文学的マニフェストだったのである。そこでは、コンスタンティヌス1世以後の世界の新しい知的・神学的・政治的現実が統合され、ローマの詩は新たな生命を得ることになった。しかもプルデンティウスの詩は、ローマ帝国のキリスト教徒のアイデンティティを、宗教的のみならず政治的な次元において表現するものでもあった。その意味で、プルデンティウスは、18世紀のあるラティニストの評したごとく、「キリスト教徒のウェルギリウスでありホラティウスである」というに相応しい。

にもかかわらず、プルデンティウスは、文学史上で彼に払われて当然の敬意を払われてこなかった。先行研究のなかで、プルデンティウスと彼の詩は、4世紀のローマの文学的・政治的・知的背景との関連で考えられてはこなかった。詩は、この時代に起こった革命的な思想の変化のインデックスのごとき扱いしか受けてこなかったのである。近年の研究もまた、4世紀の知的歴史に対するプルデンティウスの関係と貢献とを考慮していない。

そこで著者は、文学的・歴史的・哲学的・神学的思想が巧みに統合されたものとしてプルデンティウスの作品を把握することによって、詩人のオリジナリティについて、より広くより深く、しかも一層遠大な射程を探索せんとする。著者はいう、プルデンティウスは、ローマ叙事詩の伝統・聖書・キリスト教神学・異教哲学などの知的遺産を利用し、4世紀におけるギリシャ・ローマの文学と知的伝統との再定式化（reformulation）に対し多大な貢献をなしたのだ、と。

このように述べたのち、著者は、プルデンティウスと彼の詩を、古代末期の知的・芸術的生活の中心に復帰させるべく、続く各章において議論を展開してゆく。イントロダクションでは各章の検討内容が簡潔に要約されているので、それも参考にしながら、以下、評者の関心に従って本書の内容を略述してゆくことにしたい。

第1章で著者は、プルデンティウスの詩を文学的・歴史的に評価するには、聖書との関係と同様にローマの伝統との関わりを考慮せねばならぬとし、『靈魂をめぐる戦い』と、ウェルギリウスによるローマ建国叙事詩『アエネイス』第6歌との比較分析を行なう。著者は、『靈魂をめぐる戦い』の構造と意味のなかに、『アエネイス』第6歌で歌われた冥界への下降（Katabasis）のモチーフが固く埋め込まれていること、そして、プルデンティウスによるこのモチーフの利用が、叙事詩の根源的なカテゴリーを再形成したこと、の二点を論じ、キリスト教徒の詩人すなわちプルデンティウスは、ローマ叙事詩の伝統を継承する者としての地位に値すると結論づける。

かくなる評価を受けたプルデンティウスが、では、どのようにキリスト教とローマ叙事詩の伝統とを結びつけたのか、という問題が考察されるのが、続く第2章である。

著者は、プルデンティウスは、ローマ叙事詩の伝統を拒絶するのではなく、それに従い、国民意識（national identity）に関して新しい定義を提供した、という。詩人は、天地創造・受肉・最後の審判といったような聖書中の出来事と、ロムルス時代から自身の生きるテオドシウス1世の時代に到るまでのローマの歴史の全体とを、ひとつの統一的叙述を形成せんがために結びつけ、そこにローマ・キリスト教的な帝国の歴史が産み出されることになった。すなわち、救済史（salvation history）である。

著者によれば、この救済史を叙述する際、プルデンティウスが『靈魂をめぐる戦い』や『殉教の勝利の栄冠について』のなかで用いたのが、予型論であるという。予型論とは、辞書的には「神学、聖書解釈において、特に旧約聖書の様々な記述、人物などの内に、キリスト教的な摂理に属する事柄の予型（typos）ないし予表を見出す解釈法¹²⁾」のことであるが、著者の定義によれば、「時間的に異なる時代に由来する行動および／または出来事の間的一致」であり、それは「その一対のものが歴史的叙述を構築するための手段である限りにおいて、一貫した歴史的表象のなかへと統合されてゆくもの」であるという¹³⁾。

著者は、このプルデンティウスによる予型論の利用に、例えば彼と同時代の詩人ノラのパウリヌスなどとは異なる、彼の独自性を見出している。すなわち、プルデンティウスが予型論を利用したことによって、ローマの歴史はキリスト教的な救済史の一部として読者の前に提示されることになったのであり、それゆえ、予型論は、救済史のなかにおいて中心的な役割を果たすものだ、と著者は主張するのである。

こうして、ローマ帝国の歴史とキリスト教とが結びついた救済史について、そして、それらが結びつくにあたって予型論が重要であるということが論じられた。続いて、章題において対をなす第3章と第4章では、『靈魂をめぐる戦い』を主たる分析対象として考察が進められる。

プルデンティウスがアレゴリーを叙述的に利用したことが、彼の文学史に対する主要な貢献であることは多くの研究者が認めるところであり、就中『靈魂をめぐる戦い』が、アレゴリー詩の端緒として耳目を集めてきたことは既に触れた。著者が第3章で論じるのは、このアレゴリーの果たす機能についてである。

著者は、第3章において、聖書と『靈魂をめぐる戦い』との比較分析から、プルデンティウスによる聖書の予型論的解釈が『靈魂をめぐる戦い』中における徳と悪徳との擬人化（personification）の構築に寄与したこと、そして、その予型論的解釈はまた、『靈魂をめぐる戦い』中の、神や魂といったはっきりとは言い表せないものについてのアレゴリーの表現の本質を形成するものであったこと、の二点を主張する。

先に著者は、第2章において予型論と歴史との結びつきについて論じたのであるが、第3章では逆に、『靈魂をめぐる戦い』中の聖書的な予型論が、かえって非歴史的な（non-

historical) 効果をもたらしていると論じる。そして、この歴史的なものと非歴史的なもの (ahistorical) との結びつきが、プルデンティウスのアレゴリーのエッセンスを、従ってまた彼の詩のオリジナリティを構成していると述べるのである。

聖書すなわちキリスト教とアレゴリーとの関連は以上のようなものであるが、では異教哲学との関連はどうかという問題が考察されるのが、次の第4章である。

プルデンティウスがウェルギリウスの伝統の継承者として、異教文学の遺産を躊躇いなく受容していることは第1章で既にみた。第4章で著者はさらに進んで、プルデンティウスのキリスト教的理解と異教の知的遺産との関係を考察しようとする。それは、著者によれば、「彼の詩とそのアレゴリーを分析するための肥沃な土壌」であるという。なお、ここで著者が「異教の知的遺産」というのは、ウェルギリウス以来の文学的伝統ではなく、プラトンからエピクロス主義及び新プラトン主義に到る豊かな哲学的伝統を指している。

著者は、この哲学的伝統に由来する思想と形象とが、『靈魂をめぐる戦い』における擬人化と予型論との構造のなかに直接的なかたちをとって現れている、という。すなわち、『靈魂をめぐる戦い』の主要モチーフは徳と悪徳との対立であるが、プルデンティウスは、悪徳を擬人化するためには異教哲学的な思想を直接に利用し、逆に徳を擬人化するためには、キリスト教化された異教哲学的思想を利用した、というのである。

そして、エピローグで著者は、プルデンティウスによる予型論の利用が、その「詩の文学的野心、歴史叙述的な位置、知的遺産にとってどれほど本質的なものであるか」をこれまでの各章において論じてきたと述べ、プルデンティウスの詩における「自己」(the self) とはどのようなものであるかを語る。著者によれば、それは、関係的なもの (the relational) 及び個人主義的なもの (the individualist) というふたつの概念軸に沿って理解することが出来るものだ、という。著者が「関係的」というのは、神・キリスト・人間という三者の予型論的關係を指し、それは救済史のヒエラルキーのなかに人間存在を位置づけるものであり、また「個人主義的」とは、「内心に向かう転向」("inward turn") を述べたアウグスティヌスの『告白』と異なり、プルデンティウスの場合は「内なる空間」("inner space") への飛翔として理解すべきものであって、そこに彼の独自性があると著者は述べる。そして最後に、E.AuerbachやE.R.Curtiusらの見解に触れつつ、著者は、文学史上におけるプルデンティウスの重要性を改めて強調し、筆を擱く。

さて、以上の拙い要約に加え、二、三の気づいた点を指摘して稿を閉じることにしよう。

本書は、予型論がプルデンティウスの詩の中心的位置を占めることを明らかにせんとの一貫した目的の下で書き著されたもので、各章毎に検討すべき課題と対応する結論とが明示されているために、行論及び使用される概念の複雑さ・難解さにもかかわらず、通読そのものは比較的容易である。しかし、本書全体の意図を踏まえるならば、書名の「ローマ的な自己」は、むしろ「ローマ・キリスト教的な自己」とでもしたほうが適切であったかと思われるし、プルデンティウスに関する学説史の展開についても、今少しまとまった

かたちで詳しい記述がなされていたなら、一層有益だったであろう。

本書において気になる点は幾つもあるが、その最大のものは、著者がプルデンティウスや彼の用いたアレゴリーについて述べる時、何々の何々の (-cal, -cal) という形容詞を幾つも連ね、哲学・歴史・神学・宗教・文学など、現代では通常各々別個に扱われる領域が、なべてプルデンティウスにおいて統合されていたかのごとくに論じているという点である。それは、本書の謝辞冒頭に述べられたように、詩人プルデンティウスの復権を叫ぶ著者の文学的愛情がそうさせたと考えられなくもない。しかし、このように論じられた結果として、著者のプルデンティウス評価の力点がどこに置かれているのか、しばしば不明瞭になってしまっていることは否めまい。さらに、著者が、プルデンティウスというひとりの詩人に4世紀のあらゆる知的側面における革新性を代表させたことは、かえって彼と彼の詩を、「インデックスのごとき」ものとして扱う結果を招来してしまいかねないのではあるまいか。

この問題は、プルデンティウスの置かれた同時代史的な環境や彼の詩を生み出すに到った背景との関連について、著者は先行研究者の不手際を批判しながら、自身ほとんど踏み込んで論じなかったこととも関連している。確かに本書は歴史書ではないが、にもかかわらず、著者の主張するごとく、プルデンティウスにおいてローマ的伝統とキリスト教とが分かち難く結びつき、それが単一的理解を許さないこの時代の独特の相貌のひとつを浮かび上がらせているというのであってみれば、著者は、この時代を理解するための具体的な手掛かりを幾許かでも展望として示すべきであったろう。そもそも現在学界において、詩人の生きた時代に関して相当の知見の深まりを見ている以上、かつていわれてきたごとく「過渡期的人間」「過渡期的矛盾」¹⁴⁾ としてのみプルデンティウスとその詩を把握し、もって能うところ足れりとするのは、もはや困難なのであるから。

しかるにそれは、著者が歴史家に残してくれた課題であるともいえる。すなわち、本書において示されたプルデンティウスの思想を、例えばこの時代の人びとの心性についての歴史的認識へと還元することが可能か否か、またそれを新しい時代像構築の一助とすることが可能か否か、といったごとき問題は、歴史家にとって検討に値する問題であろう。4世紀後半から5世紀にかけてのローマ帝国には、プルデンティウスのみならず数多くの優れた詩人が輩出したのであるから、このような検討の試みは今後一層の重要性を持つに違いない。この限りに於いて本書は、参照すべきひとつの事例であるといえよう。

註

- 1) プルデンティウス (1967) (家入敏光訳)『日々の賛歌・靈魂をめぐる戦い』創文社, 22頁。
- 2) 家入氏のプルデンティウスに関する研究は, 家入敏光 (1970)『初期キリスト教ラテン詩史研究』創文社。家入敏光 (1988)「プルデンティウス『プシュコマキア』小論」『カトリック研究』53, 25-40頁。
- 3) 無論, それは現在の学界において,「没落」「衰亡」が時代理解の概念として有効性を持たなくなったということを直ちに意味するのではない。
- 4) C.Gnilka (2000-2003) *Prudentiana I-III*, München, Leipzig.
- 5) 本邦においてプルデンティウスを主たるテーマとした研究論文には, 管見の限り, 以下のものがある。加藤武 (1994)「隠喩の生成——Ambrosius, *Hymnus I*からPrudentius, *Cathemerinon I*へ——」『パトリスティカ』1, 3-25頁。鎌田伊知郎 (1995)「プルデンティウス『シュンマクス駁論』における古典的教養の活用」『中世思想研究』37, 109-116頁。鎌田伊知郎 (1997)「プルデンティウス『ペリステファノン』における弁舌について」『史学』66-3, 345-366頁。鎌田伊知郎 (1997)「プルデンティウスの新たな生の提示」牛田徳子ほか編『観想と実践——古代ギリシアからルネサンス期にいたる——』慶應義塾大学言語文化研究所, 83-107頁。比較文学的な研究として, 磯野守彦 (2006)「プルデンティウス『靈魂をめぐる戦い』とイギリス中世演劇 *Mulberry* 55, 1-8頁。磯野守彦 (2007)「プルデンティウス『靈魂をめぐる戦い』とシェイクスピア『リア王』」*Mulberry* 56, 1-8頁。
 なお, プルデンティウス作品の邦訳としては, 前掲プルデンティウス (1967) の他, プルデンティウス (1999) (加藤武訳・解説)「アポテオシス (キリスト頌歌)」上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』平凡社, 735-828頁, 及び, プルデンティウス (2002) (家入敏光訳)「ペリステファノン・リベル (殉教の勝利の栄冠について)」家入敏光『聖アンブロシウスの賛歌』サンパウロ, 51-264頁がある。
- 6) 長友栄三郎 (1957)「詩人プルデンティウスとローマ」『宮崎大学文学部研究時報』1-3, 1-19頁。
- 7) さしあたり, 田中秀央 (1989)『ラテン文学史〔覆刻〕』名古屋大学出版会, 303-304頁。近年のものでは, 松本仁助・岡道男・中務哲郎編 (1992)『ラテン文学を学ぶ人のために』世界思想社, 270-271頁。
- 8) 家入 (1970) 326頁。
- 9) 家入 (1970) 318-319頁。修辞技法としてのアレゴリーについては, 佐藤信夫ほか (2006)『レトリック事典』大修館書店, 484-491頁も参照。
- 10) M.Mastrangelo & J.Harris (1997) The Meaning of Republic 606a3-b5, *CQ* 47, pp.301-305. M.Mastrangelo (1999) The Epicurean View of the Soul in Prudentius' *Psychomachia*, *NECJ* 26, pp.11-22. M.Mastrangelo (2000) Oedipus & Polyneices: Characterization & the Self in Sophocles' Oedipus at Colonus, *MD* 44, pp.35-81.
- 11) プルデンティウス (1967) 27-28頁。
- 12) 大貫隆ほか編 (2002)『岩波キリスト教辞典』岩波書店, 714頁。
- 13) 本書44頁。また, 本書193-194頁の註10も参照。
- 14) 長友 (1957) 12, 18頁。

【付記】本稿は平成20年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部である。